座談会

これからの野菜づくりをどうする

■消費流通と産地体制の諸問題について

市場における〝熊本野菜〟は急速に伸びつつある。だがつくれば売れるよき時代は過ぎた。現在の流通過程の中では、野菜づくりも商品性が要求され、企業的経営が真剣に考えられるようになった。これからの野菜づくりのポイントは何か、市場における〝熊本野菜〟評判記から、生産地の出荷体制の問題あれこれについてそれぞれのベテランに語り合ってもらった。

ところで座談会のネライとしましては、熊本県の野菜づくりの問題点をあれこれお話し合いいただいて、今後の指標の手がかりのようなものをつかめたらと思うわけですが、まず皮切りに大阪市場における野菜の動きといったところから塩飽さんいかがですか……。

◇大衆化したプリンスメロン

――きょうは、遠路はるばる東京、大阪の各市場から、それに県経済連、普及所といった各部門における第一線の方々にお集りいただいたわけでございますが早速にも話題に入りたいと思います。

飽塩　関西を主体にした野菜の動きは、年々五%から一〇%位伸びがあります。その中で最近特に生で食べられる野菜の伸びが著しいようですね。中には、キュウリ、ピーマン、トマトは、特に極端に伸びがある。といって一般の根菜とか土ものが全然伸びていないというんじゃないんですけれども、全般に順調に伸びてるんじゃないかと思います。

――東京の方でのスイカ、プリンスメロンを主体にした果菜類の伸びはいかがでしょうか。

上原　そうですね、特にスイカとプリンスにのみ話を絞ってみたいと思います。まずスイカにつきましたは、非常に各産地に栽培されているわけですけれども、従来からありました品種というものは栽培面では私ども素人では判りませんけれども非常に連作を嫌うとか、病気の発生によって品種、更には系統の更新が非常に強く打ち出されてきています。

中でも従来と大きく変わりました点は、施設栽培、による早期出荷が最近のスイカなどでは全国の各産地から出てきているという点が従来と大きく変わってきていると考えております。それからプリンスメロンにつきましては全国で約四千五百ヘクタールという昨年の実績ですけれども、ことしはたしてどの程度栽培がされるかまだ完全に私どもも、把握しておりません。しかし、大体前年を上回ること約一〇%程度の栽培面積ではなかろうかというように見ております。

これを　消費の面からみてみますと、このところ非常に末端の消費者の生活水準が向上してまいりまして、やれ洋風化だとか、あるいは高級化だとか、いろんな問題が出ておりますけれども、文字通り多様化時代に入ってきたというようなことでございます。ですから従来ですと、スイカというものは七月か八月にのみ食べるものであるというような消費者の印象が非常に強かったわけです。そうした意味あいから先程ふれましたような施設栽培による早期出荷というものが、消費者にたいへん歓迎されてるというのが実状のようです。

まあ、プリンスメロンにつきましては、非常に浅い歴史の中で、大衆化が完全になされたわけですね。これもやはり、五月、六月を中心とした出荷の時期ということになりますと極めて競合産地が少ない時期ということになりますね。いわゆる施設栽培による早期出荷のスイカと、更には施設栽培による早期出荷のプリンスメロン、この消費というものは非常な伸び方をしているわけです。スイカにつきましては、いわゆる施設によってあるていど、気象条件に災いされ、その間におけるいろんな問題が発生しておりますけれども、最近の技術革新、技術の向上によりまして、それらの問題も逐次改善をされてるように聞いておりますし、消費地における早出しスイカ、それからプリンスメロンについては大いに期待をしているわけです。

◇野菜の商品性とは何か…

石原　まあ、市場の方でいままでは量というか、品物が揃えばいいというようなことから高級化というか、それとも品質のいい銘柄品は高く売れるけれども、品質が落ちるものは非常に安いという格段の差がついてきたようなことが一番いま変わったような気がしますがね、私は…

（左から近藤、吉村、上原、塩飽、石原の各氏）

出席者――（注・発言順）

塩飽　修（大阪中央青果KK　そ菜部長）
上原勇記（東一青果KK果実副部長）
石原三郎（熊本県経済連園芸部長）
近藤孝博（熊本県鹿本農業改良普及所副所長）
（司会）
吉村邦敏（熊本県果樹園芸課課長補佐）

新しい産地体制をめざす

上原　石原さんのおっしゃるとおりでして、現在出ております果物の中でも銘柄間の格差というものは、商品価値以上に価格面で出ていますね。これは、いろん